

会議の概要

会議の名称	令和7年度 第2回三田市地域日本語教育推進懇話会
会議の日時	令和8年2月17日(火) 10時30分～12時25分
会議の場所	三田市役所本庁舎3階 庁議室(オンライン併用)
出席した委員の氏名	新矢麻紀子座長、遠藤知佐副座長、楊梓委員、寿賀素子委員、中村恵美委員、松田文貴委員、于音音委員、渡邊明人委員
出席した職員の職及び氏名	鶴英治健康福祉部次長、橋本純子人権共生推進課長、河島昌樹人権共生推進課係長、畠中郁香人権共生推進課事務職員、橋本晋学校教育課係長
その他出席者	なし
傍聴者の人数	2名
議事	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 報告及び意見交換 <ul style="list-style-type: none"> (1) 市教育委員会の取り組みについて(学校教育課) (2) 今年度の取り組みと来年度の予定について 3 その他 <ul style="list-style-type: none"> 次回の予定
資料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・資料1 令和7年度第2回三田市地域日本語教育推進懇話会 学校教育課(報告) ・資料2 今年度の取組と来年度の予定について
会議の概要(結論)	今年度の取組や来年度の予定について報告し、意見交換を行った。
公開非公開の区分	公開

<議事概要>

1 開会

2 報告及び意見交換

(1) 市教育委員会の取り組みについて（学校教育課）

・資料1に沿って、事務局（市教育委員会）から説明。

【事務局（市教育委員会）】

兵庫県多文化共生サポーターの配置について、マレーシアから10月に3名の児童生徒が家族で来日した。うち1名が小学生、残り2名が中学生であった。小学生1名については、昨年12月頃によく県のサポーターがついた。中学生2名については、先日、県のサポーターを1名配置できるとの連絡があり、今年度としてはあと1か月程度しかないものの、中学校に1名配置することとなった。4月以降はわからない。

三田市の語学指導員の配置について、現在10名にお世話になっていて、ネパール語については未配置のままである。県にも確認したところ、県全体でもネパール語のサポーターは本当に人が足りていない状況だと聞いている。

また、市教育委員会の新たな取り組みとして、新渡日の児童生徒に日本語指導をマンツーマンで行う制度を作成した。今年度は試行期間として、マレーシアから来日した3人に対して就学前2週間は国際交流協会、就学開始後は各学校で、国際交流協会から支援員を派遣して日本語指導を行った。

【座長】

ありがとうございました。すごくいい取り組みをたくさんされているなと思いながら資料を拝見していた。ご質問などございましたらお願いいたします。

【委員】

学校現場に勤める者として、とてもありがたいことだし、先進的な取り組みもされているなとすごく感じた。新渡日のこどもが来たときに、日本語教育という側面と母語支援という側面があると思うが、このマレー語の人には、県多文化共生サポーターが母語支援をしつつ、三田市国際交流協会の方が日本語指導に入り、1人のこどもに支援者が2人関わったという理解でいいか。

【事務局（市教育委員会）】

それが理想であったが、結局、当初は県のサポーターがついていなかったため、日本語指導しかできていなかった。

【委員】

この間中学校の校長先生と話していて、日本の学校は日本の教育課程で進んでいくため、来日したら一定期間どこかで集中的に日本語を学んだり、生活に適応したりしてから学校で受け入れるのが一番有難いと言っていた。学校現場を預かる者としては素直な感想なのかなと思い、このような取り組みをしていただけるのは非常に有難いと感じた。

就学前2週間、就学後2週間となっているが、学校では平日、実質10日である。どういうねらいがあって2週間としているのか。また、効果の検証も聞かせていただけたらと思う。

【事務局（市教育委員会）】

就学前2週間、就学後2週間という期間が、適切かそうでないかはわからない。就学後2週間が過ぎた後も引き続き支援が必要なことは変わらないため、定期的に支援できればと思っている。しかし、予算の都合などにより、どこかで線引きをし、それ以降の支援は学校にお願いしていかないといけないため、今は目途として就学前2週間、就学後2週間になっている。学校現場としては、学校へ来る前に日本語指導をある程度できた上で来てほしいと考えていると思う。就学前に2週間設定しているが、中には最初から学校の中に入り、休み時間や掃除など、学校ならではの時間の流れに慣れていきながら日本語を指導した方がいいのではという意見もある。保護者の意向やこどものケースに応じて考えていかないといけない。3週間や4週間支援を続ける必要がある場合に備え、三田市国際交流協会と柔軟に動ける体制づくりを相談している。

実際に小学校と中学校に行った3名について、校長先生や教頭先生より、学校としては一切の事前指導なしに来られるよりは全然違うと聞いている。新しく来日したこどもにとって、日本語を少しでも理解しているのと、そうでないのでは非常に大きな違いなのだろうと身をもって実感した。ただ、その後順調に行っているのかというと、やはり小学校と中学校の違いもある。また、県のサポーターが少しでも早く配置されたかどうかの違いもある。情報共有はできる限りしており、学校の中で特段大きな問題は今のところ起きていないと聞いている。ただ、家庭の中で、高熱が出て病院に行ったときに、保護者の人がうまく説明できなかったことや、家に体温計がないことに高熱が出てから学校が初めて知ったとも聞いている。母語サポーターが病院へ電話し、看護師さんなどになんとか状況を伝えた上で病院に行った場合もあったと聞いている。学校の中の支援だけでなく、家庭の中での支援についても、継続的な支援が必要だと感じている。

【委員】

ありがとうございます。今までから一步踏み出した取り組みをしていただいていることは、学校現場としてもすごく有難い。

【座長】

今の話に関して、マレーシアであれば、このご家庭やこどもたちは英語を使えないのか。マレーシアは英語を使える人が多いと思う。

【事務局（市教育委員会）】

私もそう思っていたが、あんまりであった。実はマレーシア語とインドネシア語が結構似ており、小学校で12月から配置している県のサポーターはインドネシア語の人である。マレー語のサポーターがなかなかいないというのが現状のように思う。インドネシア語のサポーターの人でも、非常に助かっている。

【座長】

私も知り合いでインドネシア語ができる日本人がいるが、インドネシア語とマレー語は、関西弁と標準語の違いぐらいだと言っていた。他いかがでしょうか。

【委員】

ありがとうございます。マレーシアに滞在する中で、英語をできる人はいるが、中華系の人も多いと思っている。こどもたちの事情なども聞きながらやっていった方がいいと感じた。

入国予定の生徒について、事前に人数や国籍などを把握できるのか。把握できるのであれば、生徒が入学する前に担当の教員と調整でき、県と相談するときの一つの重要な点になると思う。

また、大阪の事例を聞き、すごく参考になると感じた。特に、地域のブロックごとにやる場合はとてもいい参考になると思う。三田市の支援が必要な児童生徒の人数はそんなに多くないと思うが、隣の市町村との連携を来年度検討されているか教えていただきたい。

【事務局（市教育委員会）】

事前の情報把握について、やはり急に來ることも多いと思う。こちらが認識する方法としては、まず三田市に居住を決めて本庁の市民課に來られたときにこどもがいる場合、市民課には、市民課からそのまま市教育委員会へ足を運んでもらうように案内すること、市教育委員会へ一報連絡することを依頼している。

結構よくあるケースは、お父さんだけ先に仕事で日本に來ており、一定期間が過ぎれば、家族を日本に呼ぶという形がやはり多い中で、そのこどものお父さんか、お父さんの会社の人から当課へ連絡を入れたり、市民課へ相談されたりするケースである。実際、4月1日から來日するインドネシアのこどもについても、12月頃に会社の人から電話をいただいた。來日するとわかったとき、それ以外の方法で認知することができればとても有難いと思うが、そのようなケースはあまり聞いたことがない。

【座長】

なかなか難しいところではありますね。2つ目の質問について、いかがでしょうか。

【事務局】

当課の方では今はありません。

【事務局（市教育委員会）】

この制度を実施するにあたり、近隣の情報も聞いてはいた。尼崎では來日したこどもがいた際に、学校ではなく市の施設へ最初に来てもらって日本語指導をすることもあった。ただし、日数はあまり決まっていなかった方法であった。來日されたときに、就学前に日本語指導をする制度が決まっている市町の実例は聞いていない。

他市町との連携や大阪市のセンター校拠点方式について、イメージとしては三田市も同様であったが、支援員の交通の便などの課題もあったため、最初に三田市国際交流協会へ来てもらい、準備ができたなら学校へ行くという現在の方法にした。

【委員】

わかりました。ありがとうございます。三田市は支援が必要なこどもがまだ少ないため、予算や必要な言語のサポーターを用意することが、かなり難しい場合もあると思う。

【座長】

今のマレーシア人のこどもや支援について、何かご意見がありましたらお願いします。

【委員】

やはり新渡日のこどもたちが増えているが、県のサポーターは母語支援のみ行っており、日本語支援は市町任せというところが大きいと思う。市教育委員会と三田市においてもやらなければならないことは沢山あるが、まずは新渡日の人のサバイバル日本語を支援しようとのことで、今回私たちも協力させていただいた。三田市は、拠点校を置くほどは新渡日のこどもたちが同時にいっぱい来るわけではない。今の段階では、年間に少し来る感じであるため、各学校に支援員が行く対応をする。近隣の市町と一緒にするという話もあったが、交通の便や支援者たちを考えると、まずは誰かが来たときに対応するという今の方法が良いのではないかと思う。大阪市や神戸市のように毎月どんどん来る人が増えていったら、まとめた対応が必要になってくると思う。

【座長】

ご説明ありがとうございました。私も、今の段階ではそれぞれで対応することになると思う。やはり学校いきなり入るよりは、就学前の日本語指導の中で学校の話も色々出てくるように思うため、1週間でも2週間でも、日本の学校について知る初期段階があるのはすごく大事であると思う。アメリカやイギリスなど、移民の受け入れが進んでいる国では、期間は色々ではあると思うが、当たり前のように言語の事前指導があり、その後に学校へ行くようになっているのが一般的であると思う。これからも何か就学前の日本語指導ができればと感じた。

【委員】

支援員の資格について、例えば日本語検定1級を必ず取らないといけなかったり、派遣会社のようなところで応募したりするのか。私の時代だと、外国人カードを作るときに市役所で必ず登録したが、そのときに、例えばマレーシアの人がいたら予備登録してもらうのはどうか。私のこどもも、小さいころは子どもにほんご教室スキップにも参加し、大学生ボランティアにすごくお世話になった。隣の県にサポーターを借りるのも一つの手ではあるが、兵庫県内の大学に通っている留学生に予備登録してもらうのも手ではないかと思う。

【事務局（市教育委員会）】

資格については求めているが、三田市国際交流協会ですら一定程度知っている人や、子どもにほんご教室スキップや日本語サロンさんなどでお世話になっているボランティアの人が来てくれたら望ましいと思う。今回の場合は、実際に三田市国際交流協会ですら派遣者を調整の上、支援いただいている。

【委員】

母語もできて日本語支援もできる人はなかなかいない。ただし、日本語支援については、母語と日本語が両方記載されている教材を使いながら支援している。私たち支援者全員が色々な言語を習得することは難しいが、多言語版の日本語支援の教材などがあるため、こどもたちは教材を見て、母語を使いながら勉強していくようにしている。

また、最初に拠点という話があったが、学校ももちろん、色々慣れるという意味では、就学前の指導でより多くの日本語を聞けるのもいい。日本に来たばかりのこどもたちも緊張しているため、ある程度顔がわかる人が一対一で支援している期間は、こどもたち

が日本に来て、日本のことも言葉もわからないまま、いきなり学校のクラスの中に放り込まれるよりも少しでも落ち着く期間になったのではないかと感じた。

【座長】

母語支援員として留学生に登録いただくのは、すごくいいと思う。

(2) 今年度の取り組みと来年度の予定について

・資料2に沿って、今年度の取り組み概要を事務局、具体的な取り組み内容を地域日本語教育コーディネーターから説明。

【座長】

詳しいご説明をありがとうございました。写真などもあり、楽しく学ばれていることがよくわかりました。ご質問やご意見よろしくお願ひいたします。

【副座長】

今年度もたくさん充実した活動をされていると感じた。さんだくらしのにはほんご教室について、参加者人数はだんだんと増えているが、継続者は安定しないということでもよろしいか。それと同時に、日本語サロンさんでは、学習支援ボランティアの人数を超えた参加希望者がおり、対応しきれないということか。

ボランティアだけで担えないところを行政がどれだけ関わり、日本語教師の力も生かしながら対応していけるかが重要な点になると思う。日本語教師が担当する教室の人数が安定していき、ボランティアが担当する日本語講座に集中せずに、日本語教師が担当する教室にうまく吸収していければ、少しは状況を改善できるということか。

【委員】

特に、さんだくらしのにはほんご教室と同じ曜日にやっている日本語サロンさんでは結構いっぱいである。日本語サロンさんにて、さんだくらしのにはほんご教室を案内し、実際にそちらの教室へ来てくれる人もたくさんいる。初級レベルの学習者の受け皿としては、ここが大きな役割を果たしていると思っている。しかし、継続者が安定しない原因についても色々考えてはいるが、学習が続く人としては、20回中19回出席している人も何人かいるが、前期途中から来なくなりだしたら後期に入って来なくなった人もいる。来なくなった人の理由はそれぞれあると思うが、なかなか追求が難しいところがある。

【副座長】

さんだくらしのにはほんご教室は、年間を通して20回ということで、若干間隔が空く期間もあるということか。その場合、開講スケジュールが不定期になると、学習者は開催日を忘れてしまいがちである。一度開催日を忘れると、足が遠のいていく傾向もあるようだ。地域性の事情もあるが、20回という設定であれば、決まった間隔で開催していくのも良いかもしれない。また、年間を通して20回となると、その人たちの状況によって継続参加が難しいように思うため、前期10回と後期10回とし、各々で修了証が出るようにすると目標が見えやすいのではないかと感じた。

レベルの設定を少し絞っていくのも一案なのかもしれない。また、日本語サロンさんでは、学習希望者が空きを待っている状態ということで、他のところでやっていた工夫と

して、ボランティアも学習希望者も複数ずつにすると、学習者の受け入れが可能になってくる。

【委員】

色々とアドバイスありがとうございます。まず期間のことだが、私たちもまだまだ試行錯誤中で、開講日の間が空くと学習者が来なくなるということで、昨年度は夏休みの間を空けたが、今年度は夏休みをお盆頃のみ空け、間隔を詰めて年間均等になるようにした。しかし、やはり毎週開講しないと休みの日に学習者が来たり、開講日を忘れてたりする人も実際多い。また、開講日の周知が難しいところもある。来年度の工夫としては、第1、第3、第5というように、基本的に決める形でやることにしている。学習者にとってもわかりやすいと思う。

前期と後期の話について、区切りも大事であると思うし、以前は分けていた。しかし、前期が終わると、今年度の開講自体が終わったと思い、後期の講座に来ない学習者が多かった。また、前期の終わり頃の7月や8月などに入りたい人たちは、どうしても後期からの参加になってしまう。いつでもすぐ教室に入れる状況を目指しているため、年間開講にしている。

【委員】

年間を通していつでも受け入れるようにしているため、途中でやめてしまう人もいるが、後から入ってずっと続けられる人もいる。全体として6人から12人程度の参加で継続できているのはいいことだと思う。間隔が空くことについて、さんだくらしのほんご教室は今年1月末で終わり、2月から4月まで空いてしまう。この課題については、やはり解決しなければならぬと考えている。

【座長】

ご質問ご説明ありがとうございます。開催時期は難しいですね。他いかがでしょうか。

【委員】

日本度サロンさんだの材料代について、途中で入った場合は按分計算か。

【委員】

途中からだ、と、半期全額分ではなく、多少減額する。

【委員】

日本語サロンさんだについて、ボランティアと学習者のマッチングが難しいと思う。相性が悪い人同士がマッチングされる場合や、よく休みがちだからと一緒にいる場合もあると思う。その場合、やる気が少し喪失すると思う。

【委員】

やはり学習者も支援者も色々な人がいる。マッチングの結果、支援者が非常に頑張っているのに、学習者が連絡もなく休み続ける内に、頑張っている支援者ももういいかということになる場合も沢山ある。しかし、日本語サロンさんだの場合は、一年間でペアを変える方法にしているため、うまくマッチングできた場合も、少し合わないと思っている場合も、一年間頑張っていた方法で今はやらざるを得ない。

【座長】

ありがとうございます。他いかがでしょうか。

【委員】

私も三田市に来てから日本語サロンさんだを何回も参加したが、長い間続けることは難しくない。しかし、急にこどもの熱が出て病院に行かないといけないときなど、生活の中で急に起こることによって、仕方なく急に休みを取ることがある。

日本語サロンさんだについて、1年間開催しているが、例えば日本に来て3か月間のみという短期間の学習もできるのか。

【委員】

可能である。3か月間だけ学習に来る家族などがたまにいる。仕方のないことではあるが、急に帰国する人や、来られなくなる人もいる。短期学習者には、各支援者が短期ならではの対応をやっている。もちろん、さんだくらしのほんご教室に関しても、いつから入って、いつやめるというのも自由にできるため、どちらの講座に関しても必要な期間のみの学習は可能である。

【座長】

ありがとうございました。他いかがですか。

【委員】

毎年懇話会に参加し、色々と充実した話があり、特に参加者の笑顔を見て、とても楽しかったのだろう、私も参加してみたいと思った。一つお伺いしたいが、今年の防災訓練の参加者の中に、昨年度参加された人はいるか。

【委員】

昨年度参加した人もいる。特に三田市では、数年前から外国人防災リーダーを立ち上げ、そのメンバーについては必ずしも毎回ではないが、防災関係のイベントに来ていただいている。

【委員】

来年度の計画の中でも防災訓練があったと思う。ぜひ、お話のような参加された人たちの経験を生かしながら企画いただければと思う。もう一つお伺いしたいのは、今年の学習支援者の人数は増えたのか。

【委員】

支援者の人数は増えているが、日本語を学びたい外国人がもっと増えている。

【委員】

先生との相性が悪く、教室に行きたくなくなる気持ちなども分かるが、学習者に対して思うのは、気楽に授業へ来るのではなく、覚悟をもって来た方がいいということだ。気軽に来て継続できなくなるのはとてももったいないと思う。

そして、留学生の予備登録の話があったが、私自身も高校生を支援していた経験がある。昔、横浜にいたときの経験ではあるが、高校生への支援は、中学生や小学生よりも難しい場合がある。解決策として、留学生はもっと年齢も近いため、母語か授業の支援ができると思う。ただ、予算の都合や、留学生も不安定な環境にいるため、留学生からの支援をどうやって継続させるのかは本当に難しい課題のように思う。高校生への支援は、来年度の取り組みにおける優先順位としては高くないが、少しずつ考えてもいいと思う。

最後の意見だが、懇話会の委員としては何年間も事業に携わっていて、毎年共通になっている課題なども伺っている。この数年間の課題などを自分自身でまとめ、発信したい。

【座長】

ご意見とご感想をありがとうございます。他いかがですか。

【委員】

他市の国際交流協会より、三田市は、兵庫県地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業モデル事業実施後もずっと取り組みを続けており、とても羨ましいと言われた。確かにモデル事業として始めるのは、機会を得ればできるものの、続けていくことは難しい。三田市、私たち、支援者、そして市民の理解と協力があつての継続だと最近つくづく思っている。ありがとうございます。

【座長】

続けていくことはなかなか難しい。文科省の地域日本語教育の空白地域に教室を立ち上げるスタートアップ事業のアドバイザーをしている。三年間支援があり、アドバイザーの派遣や、助成金をつけて立ち上げまではこぎつける。しかし、支援後も自立して、自分たちの予算と人材でやっていかないといけなくなったときに、取り組みがなくなってしまう地域や、低迷してしまう地域がやはりある。その中で、懇話会も含めて、三田市の取り組みが続いていることは素晴らしいと思う。また、コーディネーターの力がとても大きい。学校教育も、毎回懇話会で取り組みを聞く中で進展していると感じる。ぜひこれからうまくいくといいと思っている。

私からも質問で、兵庫県のこどもの進学について、外国人特別枠のある高校の倍率が2倍ほどある。受験に落ちたこどもたちは、定員割れの学校に行くのか、それとも私立に行くのか。

【委員】

去年も実はかなり枠を超えており、私たちの関わりのあるこどもたちは合格したが、他で聞くと、定員割れの高校の一般入試を受けたり、定時制や通信制の高校に行ったりしている。英語圏のこどもたちにとっては私学も選択肢に入るが、外国人特別枠のある高校を落ちてから私学を受験するというのは、なかなか難しい。場合によっては、もう一年勉強して再挑戦するこどもたちもいる。やはり、普通に日本人と一緒に日本語でのテストを受けることが難しいこどもたちが外国人特別枠の高校を受けるため、その高校を落ちたこどもたちはかなり大変である。仮に定員割れの学校に合格しても、外国人のこどもたちがたくさんいるわけでもない場合が多い。合格後のフォローを考えると、試験に落ちたらどうしようかなというところは、悩みどころである。

【座長】

ありがとうございます。私が勤務する大阪産業大学の学生が、ダイレクトのこどもたちを支援する大阪の「こどもひろば」の活動に参加している。ダイレクトというのは、母国で中学をすでに卒業しており、日本に来てから日本の中学校などへ通わずに直接高校受験をしないといけないこどもたちのことを指す。その団体でもダイレクトのこどもたちがものすごく増えており、外国人特別枠の高校への入学が厳しくなっている。今後も全国各地

で同じ状況が出てくると思われるため、対応を考えないといけないと感じているが、こちらではどのような支援をされているのか。

【委員】

2、3年前にダイレクトのこどもたちがいて、今ちょうど高校3年生であるが、外国人特別枠の高校に入学した。日本語検定2級も取得し、進路も決まっている。一方、今年ちょうど去年11月に渡日したことがおり、もう期間もない中でなんとかその子なりに頑張っているが、外国人特別枠の高校を希望する受験者が多いため心配である。

【座長】

ご説明ありがとうございました。ダイレクトの場合、日本語もできないケースが多いと思う。今後、このような支援がより必要になってくると思う。他いかがでしょうか。

【委員】

事務局からの説明より、外国人の転入者数が増えていることや、家族滞在の話があった。家族滞在について、夫が仕事のために来日し、家族として滞在しているため、家族は資格内では就労できない。留学生と同様に、資格外活動として、決まった時間内で働かないといけないが、日本語が全くできない人や、限られた時間でしか日本語を勉強していない人だと、なかなか仕事は見つかりにくいと思う。

【座長】

留学生もそうだが、私が知っている夜間中学のネパール人の生徒は、お父さん、お母さんがインド料理屋をされており、その家族滞在で来日しているが、日本語があまりできないため、ホテルのベッドメイクなど、日本語を使わなくてもできるような仕事をしている。

・資料2に沿って、来年度の取り組みの概要を事務局から説明。

【座長】

ありがとうございました。日本語教師について、留学生対象に教えてきた人がたくさんいるが、地域日本語はやはり少し特殊なスキルや考え方が必要だと思う。さんだくらしの日本語教室の教師の中で、地域日本語教育ならではのスキルや考え方を持っている教師も増えてきているのか。

【委員】

私たちがお願いしているプロの先生は、兵庫県国際交流協会(HIA)へ主に依頼しており、地域の日本語教育に慣れたベテランの先生や、最近ではそれ以外でも先生からの紹介などで増えてきている。

【座長】

日本語教師は増えてきているものの、地域の日本語教育ならではのスキルや考え方をを持った教師が不足しているような状況であったため質問した。他にいかがですか。

【副座長】

育成就労の始まりや特定技能2号への移行など、日本語の要件が今よりも厳しくなっていく。国際交流の事業や事業所、外国人の中でニーズが増えてきているように思うが、市としてどのように対応するか整理されているか。

【事務局】

事業所への働きかけ等は現在行っていない。しかし、特定技能所属機関に協力確認書を提出いただいております、連絡先を把握しているため、そのような事業所に対して情報提供することは可能であると考えている。

【委員】

今後は三田市も特定技能1号の5年間を終えた人たちが2号に移行する場合が増え、特に家族の呼び寄せが増えると思っている。また、在留資格の更新も出入国在留管理庁で色々変わってきており、永住申請をするのに日本語能力試験N3がいるようになるなどの話もあるようだ。制度の変更により来る人が出てくるなど、対応もどんどん変わってくるため、今後ニーズが増えてくると感じている。企業の方でも、協力するところはするが頑張ってもらっていただきたいと思う。

【副座長】

他の県でした調査結果によると、育成就労など日本語要件が厳しくなっていくことについて、聞いたことがなかった、知らなかったと答えた事業者も一定程度いるとのことだった。今は制度が変わっていくときであり、情報が浸透していくまでにも時間がかかるため、動き始めてから困ることもありがちである。事前に動けるところがあれば、心づもりとして考えておくことも大切な点であると思った。

【座長】

大事な視点のご提供をありがとうございました。先ほど申していたスタートアップ事業のアドバイザーについて、私は北海道 富良野市を担当しているが、その市では、技能実習ではなく、もうすでに特定技能の方が多いぐらいである。日本は、他国と比較して事業所の協力がかなり少ないと感じる。特定技能所属機関からの協力確認書の提出などをきっかけに、例えば日本語の習得ですごく困っている人を教室に来させたり、地域内の足場が悪いところに送迎する等、協力してもらったりするなど、事業者にもぜひ今後はもっと関わってもらえたらと思う。

また、文科省のスタートアップ事業のアドバイザーの会議で、今後外国人がますます増えてくる中で、企業も関わっていく必要があるのではないかという話があった。内容について、経団連のホームページにも記載されているので、ぜひ、経団連の考えでもあるということをお伝えながら、事業者にも協力してもらえようように動いていってもらえたらと思う。

3 その他

次回の予定

【事務局】

今後の予定について説明。

次回の懇話会は令和8年7月頃を予定しており、引き続きお世話になる委員には改めて日程調整させていただく。

4 健康福祉部次長あいさつ

5 閉会